

科学研究費助成事業（特別推進研究）中間評価

課題番号	19H05457	研究期間	令和元(2019)年度 ～令和5(2023)年度
研究課題名	地域歴史資料学を機軸とした災害 列島における地域存続のための地 域歴史文化の創成	研究代表者 (所属・職) (令和3年3月現在)	奥村 弘 (神戸大学・人文学研究科・教 授)

【令和3(2021)年度 中間評価結果】

評価	評価基準	
	A+	想定を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(研究の概要)		
<p>本研究は、研究代表者がこれまで実践してきた、大規模自然災害の中での記憶継承のための学としての地域歴史資料学を踏まえ、1)「地域住民による歴史資料と歴史文化の継承方法の開発」、2)「地域歴史文化創成に資するデータの国際標準構築と全国的なデータインフラストラクチャーの構築」、3)「地域社会形成史の通史的提示」を三本柱としている。本研究では、これら 1)～3)によって人口減少や大規模災害などにより危機に瀕している地域が存続するための基盤となる、新たな地域歴史文化の創成を目指している。</p>		
(意見等)		
<p>失われつつある地域の記録資料を学術資料として継承し、活用することにより地域歴史文化の創成に寄与するという試みとして本研究は発足した。これまでの進捗状況としては、各地域の資料収集、デジタルプラットフォームの構築などの点で一定の成果を得ている。資料収集は新型コロナウイルス感染症の影響による制限が研究推進を難しくしている中、オンラインを活用しながら研究者・自治体関係者・住民との有機的連携を行いながら研究を進めている点は評価できる。また、データベース公開、国際標準のデータ公開方法や倫理に目配りしており、デジタル・ヒューマニティーズの可能性を切り拓く重要な貢献をなしつつある。</p> <p>一方で、新型コロナウイルス感染症、スペイン風邪等、時事問題に言及しつつ、視点が散漫化している印象も受けた。今後は、資料の質や位置づけを明確化し、「予見していなかった成果」を増やすことを期待したい。</p>		